

稲作技術情報 No. 4

令和 7 年 7 月 22 日
鳥取県産米改良協会

■穂肥の確実な施用により高温障害を軽減し1等米比率の向上と収量確保につなげましょう

※ いもち病の急性病斑が発生したほ場において、中干し期間中の場合は落水を中断し、緊急防除を行って病勢が治まってから穂肥を施用する。

■品質向上のためには穂肥Ⅱが重要です

- ※ 穂肥Ⅰができなかった場合は、穂肥Ⅱを確実に施用する。
 - 穂肥Ⅱが遅くなると食味値の低下につながるため、時期を遅くしないこと。
 - 穂肥Ⅱ施用時の葉色診断により、窒素施用量を調節すること。

■「星空舞」は穂肥施用の時期・施用量を遵守しましょう

- ※ 穂肥Ⅰ → 時期:幼穂長8～10mm時 窒素施用量:葉色に応じて2kg/10a もしくは無施用。
- ※ 穂肥Ⅱ → 時期:穂肥Ⅰ施用の7～8日後 窒素施用量:葉色に応じて0～2kg/10a で調節する。
 - ☆ 基肥一発体系では、穂肥を原則施用しない。葉色が極端に淡い場合の穂肥施用についてはJA・普及所等に相談の上、実施を検討する。

■「きぬむすめ」は、適期適量穂肥を確実に施用しましょう

- ※ 穂肥Ⅰ → 時期:幼穂長1mm時 窒素施用量:3kg/10a
- ※ 穂肥Ⅱ → 穂肥Ⅰの10日後 窒素施用量:2kg/10a
- ☆ 穂肥の施用が遅れると食味値の低下や登熟遅れが懸念されるので、穂肥は必ず適期に施用する。

■飼料米知事特認品種「日本晴」・「コガネヒカリ」は、穂肥を確実に施用し、反収向上を目指しましょう。

- 【分施の場合】※ 穂肥Ⅰ → 時期:幼穂長1mm時 窒素施用量:3kg/10a
- ※ 穂肥Ⅱ → 穂肥Ⅰの10日後 窒素施用量:2kg/10a

【基肥一発肥料の場合】

- ※ 葉色が低下した場合、幼穂形成期予測の10日後(穂肥Ⅱ施用時期)に、窒素施用量2kg/10aを目安として施用する。
- ※ 幼穂形成期予測は、コガネヒカリはひとめぼれに準じ、日本晴はきぬむすめに準じる。
- ☆ 水稻の基準単収は514kg/10aです。基準単収以上の収量を目指しましょう。

■基肥一発施肥体系でも葉色が淡い場合は穂肥を施用しましょう(※星空舞以外※)

- ※ 穂肥Ⅱの時期まで待っても葉色が淡い場合は、穂肥を施用して、登熟期間の肥切れによる白濁粒の増加を回避する。

I 天気概況

1 天気予報

全国 鳥取県の季節予報

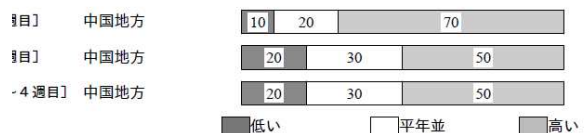
1か月予報 3か月予報 1か月予報解説資料 1か月予報参考資料

中国地方（山口県を除く） 1か月予報（07/19～08/18）	
2025年07月17日14時30分 広島地方気象台 発表	
特に注意を要する事項	期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月 07/19～08/18	天候 平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温 平均気温は、高い確率60%です。
	降水量 降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。
	日照時間 日照時間は、多い確率50%です。
1週目 07/19～07/25	気温 1週目は、高い確率80%です。
2週目 07/26～08/01	気温 2週目は、高い確率50%です。
3～4週目 08/02～08/15	気温 3～4週目は、高い確率60%です。

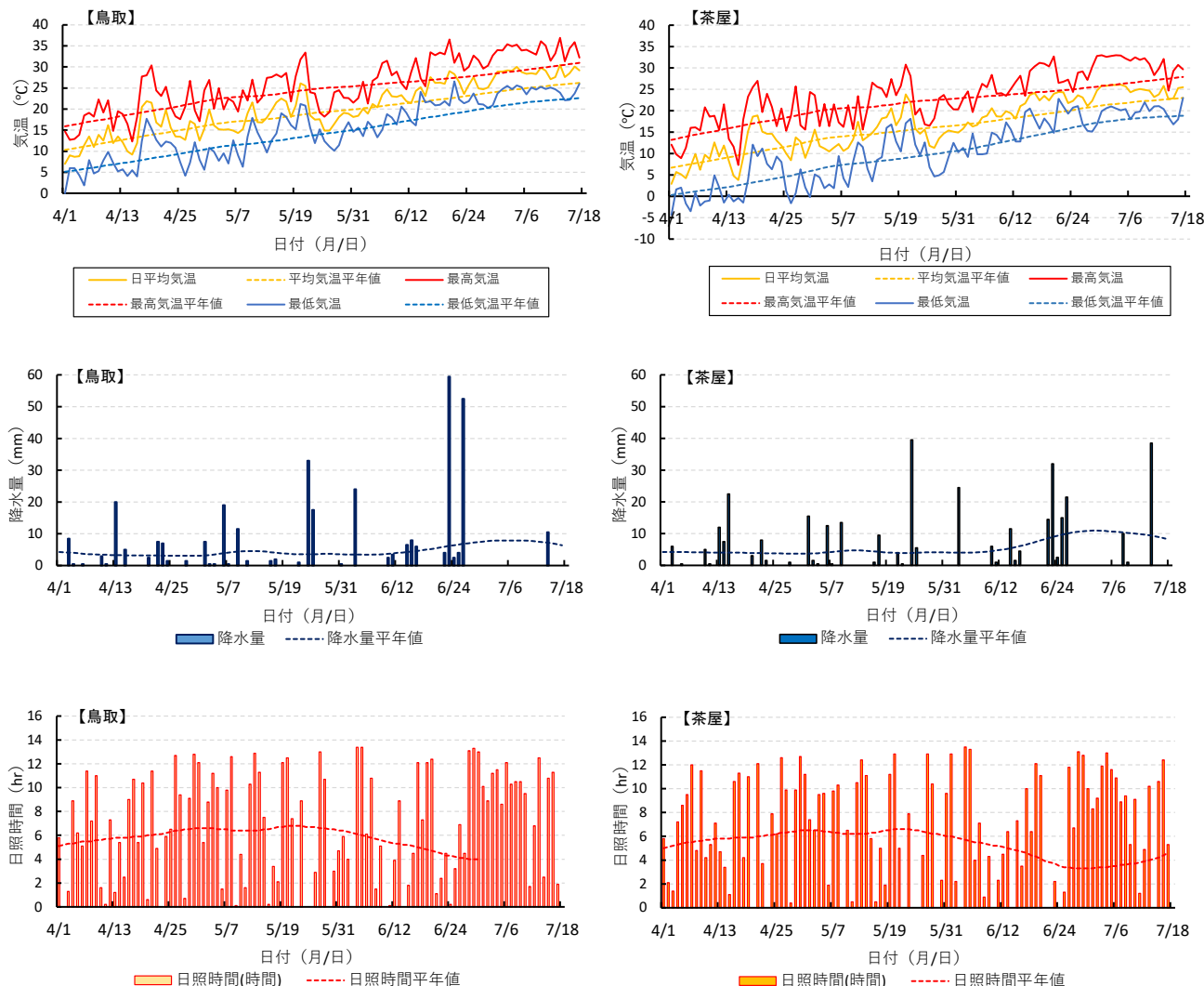
こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞



温経過の各階級の確率（％）＞



2 気象経過(アメダスデータ)



7月上旬は、平均気温が平年より高く、日照時間はやや多かった。わずかに夕立が見られる地域もあったが、期間の降水量は少なかった。

各期間の日降水量及び日照時間の合計と平年比較（鳥取アメダス）

月間 (期間)	6月中旬 (6/11~6/20)		6月下旬 (6/21~6/30)		7月上旬 (7/1~7/10)	
当年・平年	令和7年	平年	令和7年	平年	令和7年	平年
降水量(mm)	24.0	45.6	122.5	66.8	0.0	78.6
日照時間(hr)	63.1	50.9	62.2	42.1	103.2	41.7

II 生育概況

1 生育の予測:「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」の出穂期予測

田植時期別の出穂期予測について（令和7年7月21日現在）

令和2年度から、鳥取県産米改良協会では、鳥取県農業試験場の研究成果を活用し、幼穂形成期、出穂期、刈取適期の予測について情報提供を行います。（毎週水曜日更新予定）

出穂期、刈取適期の予測を行いますので、追肥・出穂前後の防除等の作業計画、適期収穫を目指した収穫作業計画の参考として活用してください。

なお、収穫適期予測については、8月上旬から提供予定です。

【情報を活用する上での注意点】

- 出穂期は、ほ場の約50%が出穂している状況のことです。穂揃期と異なります。
- アメダスの実測値及び1ヶ月予報値を基に各1kmメッシュの気温を推定し、この数値を品種ごとの生育予測モデル式に当てはめて出穂期を予測しています。（現地での確認を行いました）が、予測日の推定精度は概ね±2日以下となっています）
- あくまでも目安であり、地形、かんがい水温などのほ場条件、水管理、施肥などの栽培条件等によっては誤差がでることがあります。

【現時点での状況】

○現時点での予測では、昨年同時期の予測と比較して、

同程度～2日程度早い傾向にあります。

○ご自身のほ場の標高・移植日をご確認の上、各品種予測出穂期をご覧ください。

○8/5以降の予測は、平年値(直近30年)が使用されており、今後変動する可能性が高いため、あくまで目安としてご参照ください。

農試作況田での予測

	R7予測日	直近5年平均	備考
ひとめぼれ 5月11日移植	7月20日	7月23日	3日早い
コシヒカリ 5月11日移植	7月25日	7月26日	1日早い
コシヒカリ 5月25日移植	8月2日	8月3日	1日早い
星空舞 5月25日移植	8月7日	8月8日	1日早い
きぬむすめ 5月25日移植	8月14日	8月15日	1日早い

【ひとめぼれの予測出穂期】

標高	田植日			
	4月30日	5月10日	5月20日	5月30日
0～49m	7月15日	7月19日	7月25日	7月29日
50～99m	7月17日	7月20日	7月26日	7月30日
100～149m	7月18日	7月20日	7月26日	7月30日
150～199m	7月18日	7月21日	7月27日	7月30日
200～249m	7月19日	7月22日	7月27日	-
250～299m	7月20日	7月22日	7月28日	-
300～349m	7月21日	7月23日	7月29日	-
350～399m	7月22日	7月24日	7月29日	-
上記予測日の範囲	±3日	±3日	±2日	±2日

【コシヒカリの予測出穂期】

標高	田植日				
	4月30日	5月10日	5月20日	5月30日	6月10日
0～49m	7月19日	7月23日	7月29日	8月2日	8月5日
50～99m	7月20日	7月24日	7月30日	8月3日	8月5日
100～149m	7月21日	7月25日	7月31日	8月3日	8月6日
150～199m	7月22日	7月25日	7月31日	8月4日	8月6日
200～249m	7月23日	7月26日	7月31日	8月4日	-
250～299m	7月24日	7月26日	8月1日	8月4日	-
300～349m	7月25日	7月27日	8月2日	-	-
350～399m	7月26日	7月28日	8月2日	-	-
上記予測日の範囲	±3日	±3日	±2日	±2日	±1日

【星空舞の予測出穂期】

○「星空舞」の出穂期予測式は現在検証中ですが、「コシヒカリ」に比べて最大5日程度遅くなっています。(ご参考程度にご使用ください。)

【きぬむすめの予測出穂期】

標高	田植日				
	5月10日	5月20日	5月30日	6月10日	6月20日
0～49m	8月5日	8月10日	8月14日	8月16日	8月22日
50～99m	8月5日	8月11日	8月15日	8月16日	8月22日
100～149m	8月6日	8月11日	8月15日	-	-
150～199m	8月6日	8月11日	8月15日	-	-
上記予測日の範囲	±2日	±2日	±2日	±1日	±1日

2 高温登熟が予測される場合の品質向上対策

(1) 高温登熟が予測される範囲

8月1日に出穂した場合、その後20日間の日最低気温平均値を推計し、農業試験場で作図した(下図)。

気温が平年並で推移すると仮定すると、「品質低下のリスクが高まる」最低気温23℃を上回るのは、東中西3平野の一部にとどまる。しかし、平年より1℃高ければ、中間部のおよそ標高50m地帯にまで広がる。近年では、さらに気温が上昇しており、標高200m地帯においても、コシヒカリの白濁未熟発生による検査等級2等への落等事例が多く見られる。

高温が続く場合は、間断かんがいによる根の活力維持と早期落水の防止の他、適正な穂肥による後期栄養の充実や適期刈取が品質向上対策のポイントとなるため、普段以上に徹底していただきたい。

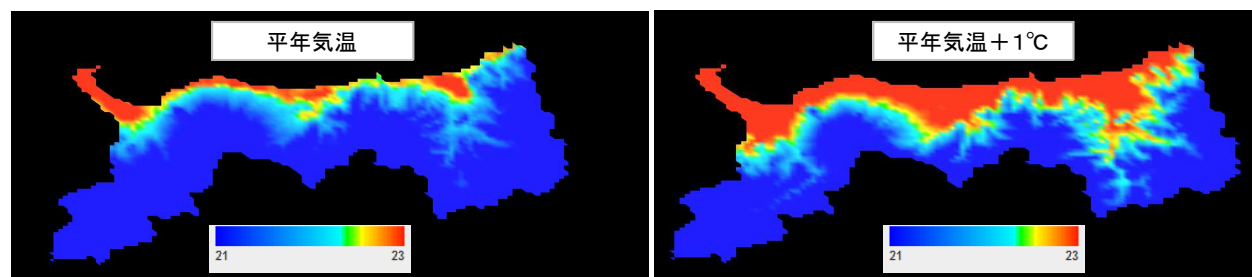


図 8月1日出穂のときのその後20日間の最低気温平均値

(2) 高温登熟の回避には穂肥施用が有効

水稻の登熟期間に夜温が高い状況が続くと、昼間に光合成で生成した栄養の内、暗呼吸で消費される量が多くなり、玄米生成に使われる栄養が減少する。このため、デンプンの結晶化が不完全となって白濁する。

従って、対策の一つは、呼吸消耗を補う栄養を補給すること、光合成能力を高めるために葉緑素を増やすこと、つまり登熟期に一定以上の葉色を維持することであり、穂肥施用、特に穂肥Ⅱの施用が重要となる。

III 技術対策

1 穂肥

いもち病の急性病斑が発生したほ場では、窒素肥料の施用によって感染が助長される場合があるので、穂肥を抑えるか、緊急防除を行い、いもち病が治まってから穂肥を施用する。

(1) 分施肥系…穂肥Ⅰができなかった場合、穂肥Ⅱは確実に施用する。

ア ひとめぼれ

5月下旬の田植では、葉色が葉色板4.5以下(SPAD37以下)であることを確認して、穂肥Ⅱを窒素成分2kg/10aを目安として施用する。葉色がこの値より濃い場合はこの値になるまで待つ。

イ コシヒカリ

5月下旬頃の田植では、今月中下旬が穂肥施用の適期(上記出穂期予想の18日前)(幼穂長8～10mm)と見られる。

ただし、葉色が濃い場合、茎数が多い場合、草丈が長い場合には表1の目安に従って穂肥を遅らせる。

ウ きぬむすめ、日本晴

幼穂長1mm時(上記幼穂形成期予想の表の日を目安)に、穂肥Ⅰを窒素成分3kg/10a施用し、10日後に穂肥Ⅱを2kg/10a施用する。葉色が濃い場合は表1の葉色になるまで穂肥を遅らせる。

※ 穂肥Ⅱは、「コシヒカリ」「ひとめぼれ」が出穂期予想の表の10日前、「きぬむすめ」「日本晴」では幼穂形成期予測の10日後の時期に、窒素成分2kg/10aを目安として施用する。

エ 星空舞

コシヒカリと同様に、出穂15日～18日前(幼穂長8～10mm)に達したら穂肥Ⅰを施用する。
穂肥Ⅱは、穂肥Ⅰ施用の7～8日後に、下表の葉色基準に沿って、窒素施用量を調節して施用する。
基肥一発施肥体系のほ場では、原則として穂肥を施用しない。

(2) 基肥一発体系

「星空舞」を除く、「コシヒカリ」「ひとめぼれ」「きぬむすめ」「日本晴」では、基肥一発施肥体系において葉色が低下した場合、穂肥施用が白濁粒の発生率低下と粒張り向上に有効となる(表2)。

※ 星空舞での追肥効果は、現在確認試験中。

＜表1＞ 穂肥の施用時期・施用量の目安

品 種	I・II	施用時期	施用量(10a当たりの窒素成分量)																						
ひとめぼれ	穂肥Ⅰ	幼穂長3～5mm (出穂前18～20日)	葉色4.0(SPAD34)以下 2kg																						
	穂肥Ⅱ	第1回目穂肥の10日後	葉色4.5(SPAD37)以下 2kg																						
コシヒカリ	穂肥Ⅰ	幼穂長8～10mm (出穂前15～18日)	葉色4.0(SPAD35)以下 2kg ※葉色が濃い場合は単葉葉色4.0以下になるまで待つて施用する。 ※コシヒカリについて、生育量が多い場合は以下の表を目安に施用時期を遅らせる。 (遅らせる日																						
			<table><tr><th rowspan="2">草丈 cm</th><th colspan="4">幼穂形成期茎数 本／㎡</th></tr><tr><th>460</th><th>490</th><th>510</th><th>530</th></tr><tr><td>70</td><td>1</td><td>3</td><td>5</td><td>7</td></tr><tr><td>75</td><td>7</td><td>9</td><td>11</td><td>12</td></tr><tr><td>80</td><td>13</td><td>15</td><td>17</td><td>18</td></tr></table>	草丈 cm	幼穂形成期茎数 本／㎡				460	490	510	530	70	1	3	5	7	75	7	9	11	12	80	13	15
	草丈 cm	幼穂形成期茎数 本／㎡																							
460		490	510	530																					
70	1	3	5	7																					
75	7	9	11	12																					
80	13	15	17	18																					
穂肥Ⅱ	穂肥Ⅰの8日後	葉色3.5(SPAD32)以下 2kg 葉色3.5～4.0(SPAD32～35) 1kg 葉色4.0(SPAD35)以上 無施用																							
星 空 舞	穂肥Ⅰ	幼穂長8～10mm (出穂前15～18日)	葉色4.0(SPAD35)以下 2kg 葉色4.0(SPAD35)以上 無施用																						
	穂肥Ⅱ	穂肥Ⅰの8日後	葉色3.5(SPAD32)以下 2kg 葉色3.5～4.0(SPAD32～35) 1kg 葉色4.0(SPAD35)以上 無施用																						
きぬむすめ 日 本 晴	穂肥Ⅰ	幼穂長1mm (出穂前25日)	葉色4.5(SPAD38)以下 3kg																						
	穂肥Ⅱ	穂肥Ⅰの10日後	葉色5.0(SPAD41)以下 2kg																						

注)単葉葉色は最上位の完全展開葉を測定する

＜表2＞ 基肥一発体系における穂肥Ⅱ時の追肥が収量、品質に与える影響(コシヒカリ)
(鳥取農試 2011-2012)

第2穂肥の有無	収量 (kg/10a)	玄米品質 (%)		
		整粒	基部未熟粒	背白粒
有	554	77.0	8.75	0.93
無	470	72.6	11.3	1.49

※生育量の目安・・・茎数400本/m²以下でかつ葉色3.5(SPAD32)以下

※追肥の判断時期は幼穂形成期頃

※上記試験は基肥としてコシヒカリ専用の基肥一発肥料を施用し、第1穂肥は無施用

＜図1＞ 穂肥Ⅰ施用時の節間と幼穂や、穂肥Ⅱ施用時の葉耳間長



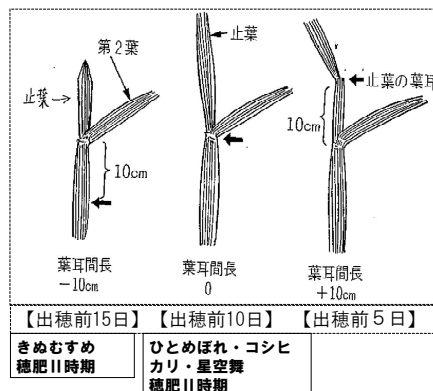
図1: 出穂25日前

きぬむすめ
穂肥Ⅰ時期



図2: 出穂18日前

コシヒカリ・星空舞
穂肥Ⅰ時期



【出穂前15日】
きぬむすめ
穂肥Ⅱ時期

【出穂前10日】
ひとめぼれ・コシヒカリ・星空舞
穂肥Ⅱ時期

【出穂前5日】

2 水管理

- ・コシヒカリ、ひとめぼれは、多くのほ場で幼穂形成期を経過し、田植が早い極早生品種は出穂しつつある。
- ・一般に水稻は、節間伸長から幼穂形成以降に乾物重が急増するため、生育経過の中で要水量が最も多くなる。
- ・この時期は、本県で最も高温で降水量の少ない時期であるため、減水が激しく水量が不足しやすい。
- ・水田の水位を細かく点検するとともに、水分を切らさない対策が重要である。
- ・中干しを実施できなかったほ場では、今後の十分な実施は不可能であるため、間断かんがいによる水管理の内、減水期間を長めにとることで、田面を徐々に硬くしていく。
- ・台風やフェーン時には、蒸散が激しくなるため、適度に水を張る。
- ・穂肥施用前には田面が隠れる程度に水位を保ち、施用後はかけ流し状態にならないように留意する。

3 病害虫防除

(1)いもち病

【発生状況等】

7月18日現在、極一部の常発地において葉いもちが発生しているが、広域発生は確認されていない。

7月17日発表の気象1か月予報によると、期間のはじめは気温がかなり高くなる可能性があり、平年に比べ晴れの日が多いと予想されている。今後の気象条件によっては、葉いもちの発生に好適となる可能性があるため、ほ場の見回りを行って、状況に応じた適切な対応をとることが必要である。

また、プラスタムによる葉いもちの感染好適条件又は準感染好適条件の出現状況については、「令和7年度病害虫発生予察指導情報 イネ・いもち病（No. 4）」（令和7年7月18日、鳥取県病害虫防除所発表）を参照いただきたい。

【防除上注意すべき事項】 稲作技術情報 No. 3 参照。

(2)斑点米カメムシ類

ア アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなど、従来からのカメムシ類

予察灯への誘殺数、水田周辺の雑草地等での発生量が多く、今後、出穂期を迎えた水田への飛来及び吸汁害による斑点米被害の多発が懸念される。別添の注意報（令和7年度病害虫発生予察注意報第2号、7月22日発表）を参考にして適期防除を徹底する。

【防除上注意すべき事項】

- ① 水田周辺の雑草地、畦畔などのイネ科雑草はカメムシ類の増殖源となるので、適正な管理を行う。

・早生品種等、7月下旬～8月上旬に出穂するほ場

出穂20日前頃に畦畔等の草刈りを行ったほ場では、再生したイネ科雑草が出穂する前に再度草刈りを行うと、カメムシ類の密度がさらに低下する。一方、出穂20日前頃に畦畔等の草刈りを行っていないほ場では、穂揃い期から乳熟期に草刈りを行い、その直後に、水田に追い込まれたカメムシ類を粉剤、水和剤などで防除する。

・遅植えほ場、中生品種等、8月中旬以降に出穂するほ場

イネの出穂20日前頃及び出穂期にイネ科雑草の草刈りを行って、カメムシ類の発生源を少なくする。ただし、イネの出穂期以降に、穂を付けたイネ科雑草の草刈りを行うと、穂で増殖したカメムシ類を水田に追い込むので、出穂期の草刈りはイネ科雑草が穂を付ける前に行う。

- ② 水田内で穂をつけたイネ科雑草はカメムシ類の発生を助長するので、見つけ次第抜き取る。

- ③ 薬剤防除を適期に行う。

・粉剤、水和剤などを使用する場合

薬剤防除は穂揃い期から乳熟初期に行い、その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。防除は地域一斉で行うと効果が高いが、出穂前散布ではカメムシの防除効果は期待できない。

・粒剤を使用する場合

病害虫防除指針等を参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う。湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を7日間とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努め、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤などで追加防除を行う。

イ イネカメムシ

※ 平坦地から中間地の一部地域で、幼穂形成期～出穂直前の水田へイネカメムシの飛来が確認されている。別添の注意報（令和7年度病害虫発生予察注意報第1号、7月11日発表）及びチラシを参考にして、発生状況に応じた適期防除を徹底する。

(3) 稻こうじ病

【概要】

- ① 窒素過多や遅い追肥、幼穂形成期頃～出穂期の低温、多雨、日照不足により、本病の発生が助長される。
- ② 土壌伝染するので、過去に発生がみられたほ場では、多肥を避け、薬剤防除を行う。
- ③ 銅剤の出穂前9日以降の散布は、効果が低く、また、薬害発生の可能性がある。

【防除対策】

- ① 出穂前10～20日頃に銅剤（Zボルドー粉剤DL、ドイツボルドーA等、いずれも農薬登録における散布時期は「出穂10日前まで」）または、出穂前14～20日頃にシメコナゾール剤（モンガリット粒剤等、農薬登録における散布時期は「収穫30日前まで」若しくは「出穂5日前まで但し、収穫45日前まで」）を散布する。
- ② 出穂後は発病穂を手で取り除く。

【収穫、乾燥、調製時の対策】

- ① 多発生ほ場とそれ以外のほ場の収穫物を一緒に乾燥・調製するとすべてのほ場の収穫物が規格外となる危険があるため、多発生ほ場の籾は別に収穫、乾燥を行う。
- ② また、籾が乾いた状態で収穫すると、コンバインの風選などの選別機能で被害籾の混入をある程度軽減できるため、朝露が乾ききっていない状態等の水分が高い状態での刈り取りは避け、晴天下で乾燥状態が良好なときに収穫する。
- ③ 稻こうじ病の病粒が混入した籾を乾燥調製する場合、籾摺り前に籾粗選機（ふるい目2.7mm）を使うと、粗籾に混じっている病粒の約66%を除去できる。また、ロール式籾摺機はインペラ式籾摺機より病粒のかげらが混入しにくいので、籾摺方式を選択できる場合にはロール式籾摺機を使用する。

（参考：新潟県農林水産業研究成果集（平成25年度）、新潟県農林水産業研究成果集（平成26年度））

イネカメムシ被害に注意

県内の広域で確認されています

被害防止&地域の発生量を増やさないため
防除対策を徹底しましょう

イネカメムシの成虫

体長 約1.3cm

鳥取県の発生状況

- イネカメムシは斑点米カメムシ類の一種です。
近年、関東以西で被害が問題化しています。
- 鳥取県内でも令和6年から広域で確認されています。
⇒ 西部を中心に多発現場が確認されており、
東部と中部でも昨年より発生が増えています。



イネカメムシの幼虫

イネカメムシの被害



出穂期の吸汁による不稔
多発すると減収



玄米の
基部に
被害

乳熟期以降の吸汁による斑点米
等級落ちの原因

鳥取県産米改良協会・コメ高温障害対策研究会・鳥取県

イネカメムシ防除は農薬での防除が基本です

生態の特徴

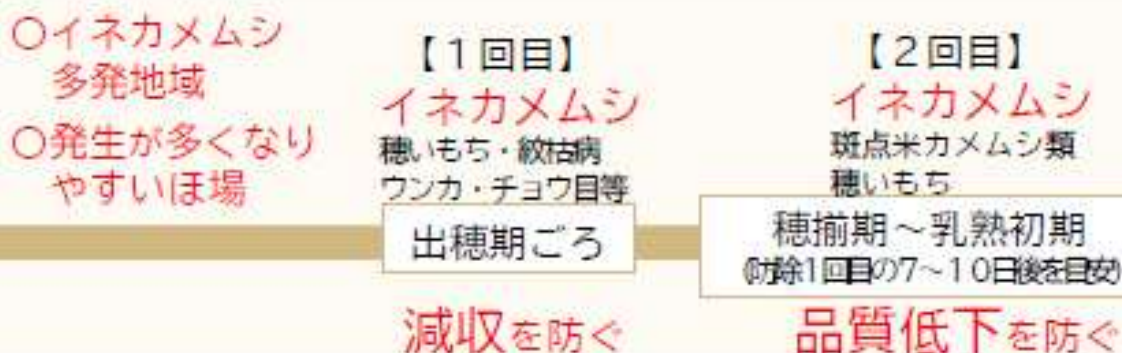
- 本種の越冬成虫は極早生品種の出穂前に越冬地から水田に飛来します。
その後、早生～晩生品種のほ場に順次移動し、穂を吸汁加害します。
- 水稻の収穫後は水稻の刈り株から出穂した穂などに寄生した後、越冬地へ移動します。
- イネカメムシは水稻の嗜好性が非常に高いのが特徴です。
⇒ イネ科雑草に寄生する個体は少ないので、草刈りでは個体数が減りません。

発生が多くなりやすいほ場

- 周囲よりも出穂期が大きくずれる（イネカメムシが集中飛来しやすい）
⇒ 例：極早生や晩生品種、地域で最も早く出穂するほ場、早生品種の中に中生品種のほ場など
- 出穂が早い品種から遅い品種まで様々な出穂期の品種が混在する地域
⇒ 本種にとって好適な餌条件が続くため、発生量が増加しやすい

基本防除対象の主要病害虫を含めた農薬のおすすめ散布時期

⇒ 防除の徹底で被害防止 & 地域の発生量を増やさない



○詳しくは最寄りのJAもしくは農業改良普及所等にお問い合わせください

令和7年度病害虫発生予察注意報第2号

令和7年7月22日
鳥取県病害虫防除所

注意報の概要

斑点米の原因となるカメムシ類の発生が多く、斑点米被害の多発が懸念されます。今後、水稻の出穂とともにカメムシ類が水田へ飛来してきますので、穂揃い期から乳熟初期の防除を徹底しましょう。

病害虫名：斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシなど）

- 1 対象作物 イネ
- 2 発生地域 県内全域
- 3 発生量 多い
- 4 注意報発令の根拠

(1) 7月上旬現在、県内4カ所（鳥取市、岩美町、琴浦町、日吉津村）に設置している予察灯へのアカスジカスミカメの総誘殺数（6月～7月上旬）は392、6頭（平年：273、2頭）と平年より多い。

(2) 現在、水田周辺のイネ科雑草地や畦畔などでは、主にアカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシが発生している。

7月14～17日に行った巡回調査の結果、アカスジカスミカメは平年並の発生であるが、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシについては平年より発生が多い（表1）。

(3) 気象予報によると、向こう1か月は平年に比べ晴れの日が多く、気温は高いと予想されており、雑草地等における増殖及び出穂期を迎える水田でのカメムシ類の加害活動に好適な条件になると見込まれる。

5 防除上注意すべき事項

(1) 水田周辺の雑草地、畦畔などのイネ科雑草はカメムシ類の増殖源となるので、適正な管理を行う。出穂20～14日前頃に畦畔などの草刈りを行った場合は、再生したイネ科雑草が出穂する前に再度草刈りを行うと、カメムシ類の密度がさらに低下する。一方、出穂20～14日前頃に畦畔などの草刈りを行っていない場合は、穂揃い期から乳熟期に草刈りを行い、その直後に、水田に追い込まれたカメムシ類を粉剤、水和剤などで防除する。

(2) 薬剤防除は適期に行う。

ア 粉剤、水和剤などを使用する場合

薬剤防除は穂揃い期から乳熟初期に行い、その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。防除は地域一斉で行うと効果が高い。なお、出穂前散布の防除効果は期待できない。

イ 粒剤を使用する場合

発生の主体がアカスジカスミカメの水田では、粒剤による防除も可能である。病虫害防除指針などを参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を7日間とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。また、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤などで追加防除を行う。

ウ 防除薬剤は表2を参考とする。また、農薬の使用基準を遵守するとともに、使用上の注意事項を守り、散布作業者の安全の確保に努める。

- (3) クモヘリカメムシ及びホソハリカメムシはイネの登熟後期まで水田内で発生する。そのため、これらの種の発生が多いほ場では防除後も発生状況に十分注意し、要防除水準（25往復50回振りすくい取り虫数4頭以上）を超えた場合は直ちに追加防除を行う。
- (4) 水田内で穂をつけたヒエ類はカメムシ類の発生を助長するので、見つけ次第抜き取る。
- (5) イネカメムシが発生している地域では、本種の適期防除を徹底する（令和7年7月11日付けの令和7年度病虫害発生予察注意報第1号を参照）。
- (6) 薬剤散布にあたっては、農薬使用基準を遵守するとともに、蜜蜂被害軽減対策などに注意する。

表1 水田周辺のイネ科雑草地などにおける斑点米カメムシ類の発生状況（7月中旬）

調査年	斑点米カメムシ類の種類別成幼虫数					合計
	アカスジカスミカメ	クモヘリカメムシ	ホソハリカメムシ	トゲシラホシカメムシ	シラホシカメムシ	
令和7年	188.1 (100%)	26.6 (31.7%)	8.3 (53.7%)	6.9 (14.6%)	7.1 (26.8%)	237.0
平年	220.8 (90.2%)	14.0 (30.9%)	1.6 (44.7%)	0.4 (10.0%)	0.3 (10.0%)	237.1

注) 数字は捕虫網5往復10回振りすくい取り成幼虫数、括弧内は発生か所率を示す。

巡回調査定点地区及びその周辺地区のイネ科雑草地(2～3か所／地区)などを調査(15地区41か所調査)。

平年値は平成28年～令和6年の平均値(令和2年及び令和3年は調査未実施)。



写真1 アカスジカスミカメ



写真2 クモヘリカメムシ



写真3 ホソハリカメムシ



写真4 トゲシラホシカメムシ

表2 斑点米カメムシ類の主な防除薬剤

剤型	薬剤名	使用時期	使用回数	IRAC コード
粉剤	トレボン粉剤D L	7 日前	3 回以内	3 A
	ジノテフラン粉剤D L (商品名：アルバリン粉剤D L /スタークル粉剤D L)	7 日前	3 回以内	4 A
	ダントツ粉剤D L	7 日前	3 回以内	4 A
粒剤	ジノテフラン粒剤 (商品名：アルバリン粒剤/ スタークル粒剤)	7 日前	3 回以内	4 A
	キラップ粒剤	1 4 日前	2 回以内	2 B
乳剤、水溶剤 など	トレボン乳剤	1 4 日前	3 回以内	3 A
	アルバリン顆粒水溶剤	7 日前	3 回以内	4 A
	スタークル液剤1 0	7 日前	3 回以内	4 A
	ダントツフロアブル	7 日前	3 回以内	4 A
空中散布剤	スタークル液剤1 0	7 日前	3 回以内	4 A
	トレボンエア―	1 4 日前	3 回以内	3 A
	ダントツフロアブル	7 日前	3 回以内	4 A

<お問い合わせ先>

鳥取県病害虫防除所（鳥取県農業試験場内、電話：0 8 5 7－5 3－1 3 4 5）

この情報は、鳥取県病害虫防除所ホームページでも公開しています。

アドレスは、<https://www.pref.tottori.lg.jp/boujosyo/> です。



農作業中の熱中症救急搬送事案が続いています。指導対象への注意喚起をお願いいたします。



熱中症対策であなただの命を守ろう！

- ☑ 天気予報・体調を確認
- ☑ こまめな水分補給と休憩
- ☑ 涼しい服装・対策グッズの活用
- ☑ 単独作業を避ける・単独作業の場合は連絡をとり合う

農作業中の熱中症救急搬送件数

年度	搬送件数(件・県内)
R1	50
R2	70
R3	40
R4	65
R5	60
R6	70

救急搬送者の年代別比率

年代	比率
90歳～	10%
～59歳	10%
60歳代	13%
70歳代	31%
80歳代	36%

の年代別比率 R1～6平均

農作業中の熱中症搬送が毎年多発！ 高齢者の発症が多い！

鳥取県農作業安全・農機具盗難防止協議会

事務局 JA鳥取県中央会JA支援部農業くらし対策室 電話:0857-21-2633
鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課 電話:0857-26-7327

農作業中の熱中症の予防管理

○ 高温時の作業を避けましょう

- 最高気温30℃以上が3日以上予想される場合には**熱中症警戒期間**が発表され、最高気温35℃以上が3日以上予想される場合には**熱中症特別警戒期間**が発表されます。
- 天気予報や県の「あんしんトリビメール」等で情報を入手しましょう。

○ こまめに休憩し、水分を補給しましょう

- 農作業には必ず水、氷（保冷剤）や濡れタオルなどを持参しましょう。
- 涼しい日陰等で休憩し、**20分ごとにコップ1～2杯の水分**と適宜塩分も補給しましょう。

○ 涼しい服装で、体温を調節しましょう

- 農作業の際は帽子を着用し、汗を吸いやすく乾きやすい素材の衣服を着用しましょう。
- **空冷ファン付き着衣や冷却グッズを有効活用**し、作業中の体温を調節しましょう。

○ 作業は2人以上で行いましょう

- 急に動けなくなることがあるため、**1人での作業はできるだけ避けましょう。**
- 1人で作業する場合は、必ず、家族等に**作業場所と帰宅予定時刻を伝えましょう。**

○ 日頃から健康管理を行いましょう

- 「**おしっこカラーチャート**」で自身のカラダの脱水状態を確認して、水分補給を行います。
- 睡眠不足、体調不良、前日などの飲酒、朝食の未摂取、発熱、下痢などによる脱水などは、熱中症の発症に影響を与えるおそれがあります。

熱中症に注意!!

おしっこカラーチャート

おしっこは、体の情報が盛り沢山!!

おしっこの色は何番ですか？

もしも**3番以上**の場合は、

「**水分と塩分の補給**」が必要です

尿の色		からだの状態と対応
1	正 常	水分補給は、十分です。
2		まだおためし、積極的に水分補給をしましょう
3		脱水症への傾向があります。
4	注 意	補給の頻度を増やすこと
5		脱水症です。
6		水分補給が必要です。口から補給できますか？
7	危 険	重度の脱水症です。危険な状態です。
8		直ぐに病院へ

鳥取県農作業安全・農機具避難防止協議会

協議会からのお知らせ

【農作業安全研修の実施希望について】

県内では毎年死亡事故を含め農作業事故が発生しています。特に死亡事故は家族にとどまらず、地域農業や法人経営に大きな影響を及ぼします。

このため、協議会では**生産者連帯組織、法人等を対象にした研修(対話型研修)の推進**を図り、生産者の安全意識の向上と農作業安全の取組を進めています。

研修を希望される方、また詳しく知りたい方は県協議会事務局へお問い合わせください。

<対話型研修とは>

日頃危険と感じている作業・機械操作・施設等について、生産者自ら仲間と意見交換しながら、安全対策について話し合いを行います。これを基にして組織や仲間の日頃から実践する目標を定め、みんなで一緒に取り組んでいただくきっかけとするものです。

